

河村建夫先生 御講演

日付 平成 25 年 11 月 11 日

会場 リニアコライダー国際会議 LCWS13

東京大学 伊藤国際学術研究センター 伊藤謝恩ホール

ただいまご紹介に預かりました河村建夫でございます。私は今回、国際リニアコライダー計画を実現するための日本の国会議員による議員連盟の会長として、このワークショップに世界中から参加されている皆さんに、メッセージを届けるという役目で参っております。

ILC はサイエンスを画期的に前進させることは勿論ですが、大型国際共同計画をモデルとして、国際貢献、国際協力のあり方、産学連携のあり方を定め、基礎科学から応用そしてイノベーションをめざし、世界の文化・教育・経済・社会生活をより豊かにしていくための重要な契機となる世界にとっても我が国にとっても重要な計画だと思います。

皆様よくご承知の通り、今、世界は極めて厳しい課題を沢山かかえています。エネルギー問題、経済・金融危機、安全保障、地球温暖化問題、水不足、食料危機など、様々な問題があります。今世紀に入ってとくに顕著なのは、これらの課題がもはや一国にとどまらない世界規模での対応が必要になっていることです。

さらに忘れてはならないのは、人が人として幸せな生活を送るためになにが重要か、GDP など経済指標だけにとどまらない文化的な価値観の増進、いわゆる幸福度指数というものに我々はさらに注意を払っていくべき時代にあると認識しています。文化と文明の両面で世界がともに成長する、これが最も重要な観点のひとつであると考えております。

地球全体のコヒーレントな持続可能な発展に何が一番重要か、私たちはよくこれを科学技術であると述べる事が多いと思います。しかし、ここでよく考えていかないといけないことがあります。ひとことで科学技術と申しましても、まず重要な事は人（ひと）です。人間が常に意欲を燃やし、挑戦し、世界と協力して課題を克服していく、そこに失敗と成功を繰り返し、自分たちの存在意義を感じながら子々孫々にそれを伝えていく、その人間の力、チャレンジする姿こそが世界の成長にもっとも大きな力と持続的発展性をもたらす原動力であると考えます。

ここに科学技術の最も大きな意義があると思います。科学技術とは単に生活を便利にするためのものではありません。便利な生活で経済活性があれば人類が発展しているというのは一面だけの見方です。科学技術の中でとりわけこの便利さ、手軽さ、といったものがもてはやされるだけでは本当の成長はあり得ません。

ILC 計画をはじめとする最先端の科学は、新しい知、つまりは文化を生み出し、そこから新しい教育と人材が生まれます。また、この科学には基礎科学から人文社会において、新たな知の獲得を目指した挑戦が人類の知の地平を拓いています。その知からはハード・ソフトの両面での新しい技術から、新しいコンセプトやデザイン、あるいは人間社会のシステムというものも生まれてきます。これには行政も含まれます。こういう新しい知を獲得しよう、新しいもの、新しいシステムを作っていこうという精神、チャレンジ精神そのものが、人類を成長させる最も大きな原動力です。そしてそれこそが地球規模の課題を解決する最重要の要素であると我々は考えています。

ILC 計画には、重要な要素がたくさん入っています。世界との協力、国際人材の育成、先端科学による新たな知のフロンティア、新しい技術による社会生活を変える大きな可能性、そこから産学での挑戦意欲を生み出し、そしてこの計画を実現するために必要な国際的やプロセスそのもの自体も新しい挑戦であり、科学技術はもとより、様々な観点での国内外でのモデルケースとなる可能性をおおいにもった計画だと思っています。

私と大型加速器との関わりは、実は地元の先代代議士である田中龍夫先生にまでさかのぼります。田中先生が文部大臣を務めておられたときに、日本で初めての世界のエネルギーフロンティア・マシンとなったトリスタン加速器の実現に力を尽くされました。このとき世界に先駆けて開発されたものが「超伝導加速器」の技術であり、この技術が現在の ILC の心臓部分になっていると聞いております。うれしいことです。

そして、かなり前になりますが、衆議院科学技術委員会に所属していた時にジュネーブ郊外にあるセルン研究所を訪問した頃があります。その時に見せていただいた巨大でかつ精密な装置に驚愕したことを良く覚えています。日本はこの欧州セルン研究所の加速器LHCの建設・運転に予算を投じ、多くの研究者が参加しております。LHC加速器と測定器の建設にあたっては、超伝導技術やセンサー技術によって、日本の企業も大きな役割を果たしています。セルンのホイヤー所長が昨年10月に来日されたとき、当時の安倍自民党総裁、現総理大臣とホイヤー氏の面談を実現しましたが、そのときにも日本の貢献のことをお話頂き、この欧州のセルン研究所でのこれからのさらなる研究と国際リニアコライダーILCの両輪でさらに宇宙の謎にせまるための国際協力をというお話で安倍総裁とも意気投合していました。

1995年に、LHCへの日本からの貢献を決めたのが当時の与謝野文部大臣です。この与謝野先生が初代会長として、我々は2006年に自民党の議員で「リニアコライダー国際研究所建設推進議員連盟」をつくり、はじめはこの耳慣れない科学の最先端の世界に戸惑いながら、少しずつその全容と意義を理解してきたものです。2008年からはこれを超党派の議員連盟に拡張することで、全ての党派

がこの計画に関心を示し、研究者の国際的な設計開発活動と実現への道のりを一緒になって支えてきたところです。

昨年、2012年の12月にはついに技術設計書を作り上げるところまで来たと聞いています。7年以上の長い期間、のべ2千人におよぶ産学の専門家が集結しての大変な研究開発であったと聞いております。改めて敬意を表すとともに、今度はこれを政治がしっかりと受け止めて、世界のパートナーシップを構築していく番だと気を引き締めたところです。

なお、ちょうどこの設計書完成イベントのあった2012年12月15日の翌日に我々は衆議院の総選挙を迎え、自民党と公明党の連立政権が圧倒的多数の議席確保となりました。私はこの時の自民党の選挙対策の総責任者でした。この総選挙において、我々自民党では総合政策集の中に、ILC計画を、経済発展と科学技術の両面での具体的なプランとして提示しております。経済発展には科学技術が必須であります、そのための司令塔および集中と選択のプロセスが必要になります。

2013年初頭からは、私、河村が議連の会長を務めております。先の選挙で引退した与謝野先生を引き継いで、この国際リニアコライダーILC計画を実現していくことが、私たちの役目であります。2006年当時のはじめは数十人の有志だけで始めたものですが、今では、議連に参加登録する国会議員は約160名の大所帯となりました。国会議員が衆議院と参議院で合わせて700名強ですので、それを考えると大変多くの国会議員が参加していることがおわかりになると思います。

今年の3月末に、このリニアコライダーの国際設計のための新組織のリーダーとなった、元LHCの総責任者であるリン・エバンス氏が、3日間ですが来日したときに、議員連盟でももちろんですが、下村博文文科大臣、科学技術担当の山本一太大臣との面談もできるようにアレンジしました。そして最後の日に、総理に是非お会い頂こうということで急な話で普通は無理なのですが、なんとか実現できました。

現在、日本では科学離れ、理科離れが大きな問題となっておりますが、エバンスさんのお話では、欧州ではLHCなどの先端科学の推進に御陰で理工系に進む学生がここ5年間で20%も増えたということです。これは驚異的です。世界が期待している状況に関しても、リン・エバンスさんのメッセージは極めてクリアでした。

ご存知のように、日本には北と南に2カ所のILC建設候補地について、技術的観点および社会的観点から、専門家による両候補地の評価をすすめて、今年8月にはILCのサイトとして北上山地が選択されました。ILCサイトはあくまで科学的、技術的な観点できめるべきだと我々政治の世界でも考えております。

さらに、文部科学省からの審議依頼で、日本学術会議は「国際リニアコライダーに関する所見」を学術の観点からまとめて発表しました。メディア報道での伝わり方もあって、よく誤解されているように思いますが、ここできちんと誤解を解きたいと思います。最終レポートでの結論は、学術的意義を評価し、不確実な部分を集中検討するように、政府予算を措置して、政府とともに2～3年の間に集中検討をすることを提言しています。特に、海外とのパートナーシップと予算に関する議論、コストの精度向上、人材の国際分担をこの2～3年の間に目処をつけることを明確に提言しています。

この後押しとともに文部科学省は、従来の研究所への開発予算とは別に、これから検討課題の達成のために、来年度の予算にILCの調査検討予算として5000万円を財務省に要求しています。この額は開発予算と比べると大きいものではありませんが、事前の国際協議などを含めて、ILC計画の実現へ向けた政府検討予算としての初めの政府からの正式な予算となります。財務省に認めてもらわねば政府予算になりませんが、これが認められれば、我々議員連盟一同が長年最重要と位置づけていたマイルストーンのひとつが達成されようとしています。

学術界ではある分野に予算が行くと他が減るのではないかと危機感を覚えるのは常であること、よく承知しています。ILCは従来の科学技術に閉じた単なる学術計画ではない、大きな意義を持っているものとして別枠の予算が取れるようにする、これは政治の責任で行うことです。

多くの国会議員の物理の知識は高校生レベルでしょう。しかし、失礼を承知で申し上げれば、多くの素粒子物理学の研究者の皆様は、政治の力学については高校生レベルなのではないでしょうか。お互いの得意分野をコラボレートすれば、我々がILCの実現を加速できること間違いありません。

これからは、これまでの研究者の連携を超え、政府がコミットした形での国際的パートナーシップを枠組み作りから進めなければならないと考えています。新たな多国間パートナーシップをこのILC計画をモデルに立ち上げたいのです。実施に向けた先端の研究者・技術者の国際ネットワーク型研究拠点をパートナーとなる国々と共同で立ち上げ、基礎科学・先端技術開発・そこから派生する先端利用技術・経済協力を含めた包括的な協力関係をさらに強め、その中でこのILC計画を位置づけるという大きな視点で新たな一步を時期を逸する事無く具体的に進めていきたいと考えています。

本日から始まるワークショップでは、リニアコライダー計画の実現に向けた建設的な議論がなされることを切に願い、私の講演とさせていただきます。どうぞ宜しく御願ひ致します。

以上